

## 「仮面」の深層における構造：芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」試論

著者	黄 曉波
雑誌名	文学研究論集
号	26
ページ	196(73)-180(89)
発行年	2008-01-31
その他のタイトル	An Essay on Akutagawa Ryunosuke
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/99631">http://hdl.handle.net/2241/99631</a>

# 「仮面」の深層における構造

―芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」試論

黄 曉 波

## 一 はじめに

芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」は、一九二〇年『中央公論』新年号に掲載され、翌年新潮社から刊行された短編集『夜来の花』に収録された。この作品の創作について、芥川本人は、一九一九年十一月二十四日付小島政二郎宛書簡で「頃来鼠小僧次郎吉を書き居る江戸詞始末に了へず」と苦心を吐露している。「鼠小僧次郎吉」における「江戸詞」の特徴については、佐藤美加が「第二段の山場で、『浮世風呂』の一節をそのまま引用している」<sup>①</sup>という研究成果がある。また、この小説の従来の研究で数多く取り上げられている焦点は、結末の種明かしの箇所である。この箇所については同時代評においても、「英雄崇拜のパロディー」で「あの有名な愛蘭土の戯曲にもかう云ふ安価な浪漫主義が面白くて取り扱われてゐる」、「上手に作り上げられた短編」<sup>②</sup>といった評価の好いものもあれば、「如何に若気の物好きと悪戯からとはいへ、最後のドンツマリに行つてまでもまだその常套手段を試みねば気がすまないと云ふのは余りにコセツキ過ぎはしないか」<sup>③</sup>といった酷評などがあり、評価は当初から二分されていた。

批判と賞賛が相半ばする同時代評に引き続き、近年までの先行研究は、さまざま論点から論じられてきている。たとえば、テーマ論についていえば、菊池弘は「巧みな描写を部分的に示すもの以上には出ない底の浅い作品」と見なしている。それに次いで、『芥川龍之介事典』で、田中実は、「芥川はこの作品において主人公の次郎吉の視点で重吉を見ている。この手法は、重吉の卑小さに対して次郎吉の一種の絶対化が行われ、英雄像の形成をより可能にし、この小説の痛快さのゆえんもここによつてゐる。最後に主人公の正体が分かる作品の構造は『奉

教人の死」と同様であるが、この小説はやや手軽で作者の人生観や人間認識もうかがわれず傑作にはほど遠い」と解説している。

また、材源研究に関しては、「講釈種であろうか。テーマはシングの「西方の人氣者」の影響があるう」<sup>③</sup>といった吉田精一の指摘を受け、奥野久美子は、参考されたと思われる講談本について緻密な考察を行い、主題論へと展開させようとしている。彼女は、「講談の鼠小僧に親しんでいる読者なら、オチまで読まずとも男が次郎吉だと読める」可能性を示し、「大悪党にかえって頭を下げるという大衆心理」に対する芥川の批判が見られるとし、その点については「講談の次郎吉には見られないもの」で、その大衆心理の卑屈さを此の小説の「主題」と認識している。さらに、結末部のオチに対して、「後までヒントに気付かない読者のための駄目押しという効果もあるが、それだけでは早い段階で気付いた読者にとっては意味がない」とし、そこは講談話に詳しい読者にとって、「男が鼠小僧であったという驚きを与えるものではなく、「大衆心理を批判したはずの次郎吉が、告白によって結局その心理に取り込まれてしまうという可笑しさを感じさせる」<sup>④</sup>ものと捉えている。

しかし、このような「親分」こそ「鼠小僧」に違いないという読みに対して、石割透は、「そうした読みに止まるならば、この小説の面白さは半減する」といい、「親分」の「(本体)は不明、それは複数の人物であるかもしれないし、実在しているのかも定かではない。多様で複雑な社会構造の中で、マス・メディアが発達、噂や情報が行き交う中では、もはや人間は(仮面)をなんらかの形で被らないでは生きることができず、(仮面)こそが(本体)となった、人間の希薄な存在を、芥川はこの「鼠小僧次郎吉」で語っているように思われる」と分析している。そして、ある人物を謎のままにしておくという手法の背景に、当時流行りはじめた探偵小説との関連を認め、後世の乱歩らの探偵小説の「先蹤をなす作品」<sup>⑤</sup>と位置づけている。此の謎の手法について、『芥川龍之介新辞典』<sup>⑥</sup>で北川秋雄は、「弱者は軽蔑するが権威には弱い」という庶民の愚をテーマにした作品と考えればむしろ結末は、本物の出現というより、第2の拐りとして読むほうが面白い」と論じており、これは石割論の補足と見なしうる。本稿でも、本物の鼠小僧が特定できないという石割・北川説を踏まえて論述を進めたい。

以上、先行論を大まかにまとめて本稿の立場を示したわけだが、先行論はいずれも、この小説の冒頭部で、「親分」と話し込んでいる「色白い子分」を考察の対象にはしていないことに留意しておきたい。芥川「鼠小僧次郎

「吉」は三節からなっていて、第二節を除いて「親分」にも「子分」にもほぼ同じ紙幅を費やしている。このことは、作者が「親分」と同じく「子分」をも重視していることを示すものであるが、それでは、その「子分」という人物は、ストーリーにおいて主役と思われる「親分」の人物造形にいかなる役割を果たしているのだろうか。つまり、彼を主役の「親分」に劣らず力を入れて描写した作者は、いかなる意図をそこにこめたのであろうか。これまでの批評では、良かれ悪しかれ、殆ど結尾の「オチ」に関心がひきつけられ、「子分」を無視した見方が大勢を占めている。しかし、もしそこにとどまるならば、むしろ作者によってなんらかの落とし穴が仕掛けられていて、その穴に陥っているかのように見える。

本稿では、「親分」と「子分」との関係を同等に分析することによって、その人物設定上のトリックと全体の構造を明らかにする。その目的は、それに基づいて、テクストに託されたある人物を謎のままにしておく手法にこれまでとは異なった解釈を見出すことにある。

## 二 芥川はどれだけ「鼠小僧」の史実に認識を持つか

本論に入るまえに、芥川自身が言及した言説から、「鼠小僧」という歴史的人物に作者芥川がどれだけの情報を把握していたのか、特に講談や歌舞伎や狂言など演劇性を除去したノンフィクション（史実）に対してどのような文献を参考にしたのか、その可能性を考察しておきたい。

まず考えられるのは、芥川の子供時代から馴染みの本所両国の鼠小僧の墓がある本所両国の回向院のことである。それについて芥川が残した作品群で触れたところも何箇所かみられる。そこから知られることは、芥川少年が関連史料の造詣があったと思われることである。それに関連していえば、一九一七年十月二十日より十一月四日まで『大阪毎日新聞夕刊』に連載された「戯作三昧」に、次のような話がある。（本稿での原文引用は、一九九八年の岩波書店版『芥川龍之介全集』による）

鼠小僧次郎太夫は、今年五月の上旬に召捕られて、八月の中旬に獄門になった。評判の高い大賊である。

それが大名屋敷ばかり忍び込んで、盗んだ金は窮民へ施したと云ふ所から、当時は義賊という妙な名前が、一般にこの盗人の代名詞になって、どこでも盛に持て囃されてゐ

「なにしろ先生、盗みにはいつ御大名屋敷が七十六軒、盗んだ金が三千百八十三兩二分だと云ふのだから驚きます。盗人ぢやございませうが、中々唯の人間に出来る事ぢやございませぬ。」(第三卷・十九頁)

「つまりまづ賊中の豪なるものでございませうな。なんでも以前は荒尾但馬守様の御供押しか何かを勤めた事があるさうで、お屋敷方の案内に明いのは、そのせみださうでございませう。引廻しを見たものゝ話を聞きますと、でっぶりした、愛嬌のある男ださうで、その時は紺の越後縮の帷子に、下へは白練の単衣を着てゐたと申しますが(後略)」(第三卷・十九—二十頁)

右の引用の傍線部分は、「戯作三昧」の典拠のひとつとされる饗庭篁村の『馬琴日記鈔』の「鼠小僧の事」を参考したものとみられる。次に挙げられるのは、珍聞・怪談を記載したといわれていた江戸時代の『甲子夜話』である。現在まで出版された芥川全作品には、直接この本に言及した記録はない。にもかかわらず、怪奇趣味で世に知られた芥川にとって、この本は実にいい素材を含んでいる。しかも、芥川は、かつて森鴎外「佐橋甚五郎」に触れていた。鴎外の作品は、『甲子夜話』などの関連資料を用いていることは、当時の文学界ではよく知られていた。そのことは、芥川も十分理解していただろう。

その『甲子夜話』には、「鼠小僧という大盗」に前後あわせて四箇所の詳細な記載<sup>(1)</sup>がある。本テキストとかかわる部分を引用してみる。

まづ鼠と謂ふゆゑは、この男小穴人の通ふべからざる処に出入し、屏壁を上り、架梁を走る等、鼠の如きを以てなり。小僧とは総じて盗みをするの称なり(巻七十八)

#### 獄門首の容躰

##### 一、平顔にて円き方肥肉の方

一、色白き 一、うすあばた有り

一、髪うすく月代のびみたれど目だゝず

一、眉常人より薄き方 一、目は小さく見へし

一体見たる所、悪党の顔色聊も無く、何かにも柔和に人物好く、職人体に見へし（中略）

又其日、環菊と云茶店に、我が中の婦往合ひて聞しは、かの盜其日の体は、縮青梅の着ものに、八反の帯びをしめ、白き襦袢着、薄化粧しに口紅を施せしと。これ店の婦目撃と云。

其方儀（中略）右依科、入墨之上中追放相成候処、入墨を消紛、猶悪事不相止（後略）（卷八十二）

以上の抜粋の傍線部分は、テキストの描写とは多少異なるところであるが、注目すべきは、服装の箇所には、共通点が見られることである。

では、テキストにおいてテーマが織り成された「親分」の語る言葉の次の箇所は、どうであろうか。

おれは八間の明かりの下で、菓缶頭の番頭が、あの飲んだくれの胡麻の蠅に、榭の酒を飲ませてゐるのを見たら、何もこの山甚の奉公人ばかりとは限ら無え、世間の奴等の莫迦々々しさが、可笑しくつて、可笑しくつて、こてえられ無かつた。

ここの傍線箇所は、実は『浮世の有様』<sup>『1』</sup>で文を締めくくるのによく使われた定型句である。「鼠小僧」についての記載にもそのような句がある。そのことは、三田村鳶魚『泥坊づくし』<sup>『2』</sup>の次の文から、裏付けられるだろう。「江戸末期に於ける武門武士は、廿七八年戦役以前の清国のやうなもので、その実力を未知数に附して、単に外形から豪いものだと臆測して居つたのです。たまたま鼠小僧に教へられて、「浮世の有様」の著者のやうに、『諸大名悉右盗人に逢候事浅間敷事也、世の中に大名程役に立たぬはなし、其の禄を食む士共、これにて推計るべし、嗚呼太平なる哉、可笑々々々々』と発明した者もありました」。

以上提示した文献は、作者芥川が、少年時代から江戸の本所回向院周辺の暮らしの雰囲気の中で、江戸趣味に

まつわる群書を博覧した時に接触した可能性もあると考えられる。

### 三 嘘ごころ

小さい頃から鼠小僧の墓がある回向院の近くに住み、講談や歌舞伎などの伝統的な語りや芝居を見聞きするといった旺盛な好奇心を示した芥川には、前節で指摘したように、歴史的な文献までも参考したからには、「鼠小僧」に対して一般的といえる知識があったことだろう。たとえば、「鼠小僧」は本職が驚人足で、小柄で、行動敏捷な侠客のような義賊であるといった情報である。これが真実かどうかは分からないが、確実に盗人にもつともふさわしくて、そう伝えられてきたのだろうということである。

ここでまず先行研究に従ってテクストの「親分」は鼠小僧であると見なしてみよう。本職は驚人足であるはずだった盗賊で「親分」と呼ばれる男は、テクストの第二節で悪い天気にも弱そうにみえる「旅なれ無え江戸っ子」と設定されて旅立った。小説の第二節では「親分」はこの一人旅の見聞譚を「子分」に聞かせるというプロットから、この「親分」が一人称語りを担わせられている。しかも、やがて自分を鼠小僧と称するようになる重吉の登場の伏線とするために、「おれの旅慣れ無えのが、通りがかりの人目にも、気の毒たらしかったのに違え無え」と繰り返すように強調されてもいる。しかし、もともと驚人足という職人は、よく職場を交えることから、あちこちを旅したらしい。とすれば、なぜ「旅慣れ無え」なのだろうか。「親分」が「子分」に話した回想のなかで三年前の旅は、甲州街道における初めての旅だと分かってくる。そのことは「そりやさう願へれば、私も寂しくなくって好い。だが私は生憎と、始めて来た八王子だ、どこも旅籠を知られ無えが」という「親分」の言葉で表現されている。もちろん、この言葉は、話が進み、八王子で「親分」に出会った重吉との会話の文脈につらなると理解してもよく、あるいはこのセリフの発信者（「親分」）の旅心と結びつけて考えてみても申し分のない答えであるうが、いずれにしても、地の文で語り手からは何の説明もないので、テクストの読み手は「親分」が八王子は始めてだと疑いなく信じてしまう。

ところが、その八王子の旅籠屋で盗人とみなされた重吉が縄で縛られると、いよいよ重吉は鼠小僧の名を名乗

つて、自慢話をする場面になる。すると、前の疑惑はますます深くなる。それはなぜかというところ、重吉の話に出てくる地名を検討していくと、「三年前雷獣様を手捕りにした場所」の横山宿、「庄屋へ忍び込み、有り金を残らず搔つ攫つ」た八王子宿、「金飛脚を二人殺し」た小仏峠、「土蔵を破つ」た府中、「つけ火をし」た日野宿、いづれも甲州街道沿いの場所だと分かる。重吉の自慢話を聞いた旅籠屋の奉公人たちの反応から、前に列挙した場所ので起こした悪事は鼠小僧の仕業だという共通する認識があったことが判断できる。そうすると、もしも「親分」が本物の鼠小僧だとすれば、彼はこの「旅」の前に甲州街道に進出してははずである。しかし、「親分」は「始めて来た八王子」と重吉に答えている。鼠小僧は、「親分」とは違う状況にあつたのではないか。本稿が「親分」と鼠小僧とを切り離そうとする意図は、この文脈的な矛盾にある。

さらに、テクストにある「三年前」という時間的設定も妙なことで前後合わない箇所がある。まず、以下の引用から検討してみよう。

① 丁度今から三年前、おれが盆藁座の上の達て引きから、江戸を売つた時の事だ。(二二五頁)

② 「何が胡麻の蠅がえらんべい。三年前の大夕立に雷獣様を手捕りにした、横山宿の勘太とはおらが事だ。おらが身もんでえを一つすりや、うぬがやうな胡麻の蠅は、踏み殺されると云ふ事を知ん無えか。」(二二四頁)

③ 「はて、このおれが云ふのだから、本望に違え無えちや無えか。手前にやまだ明かさなかつたが、三年前に鼠小僧と江戸で噂が高かつたのは——」と云ふと、猪口を控へた儘、鋭くあたりへ目をくばって、

「この和泉屋の次郎吉の事だ」(二三三頁)

この三つの引用においては、①と③は「親分」が「三年前」の出来事について「子分」の裸松に回想として喋っている言葉である。二人の対話する「今日」から三年前に、「親分」は重吉と出会うわけである。それに対し、②は重吉が「鼠小僧」の名を盗んで自らアピールした自慢話である。重吉が語った「三年前」は、重吉に対してもその場にいた「親分」に対しても「三年前」であり、鼠小僧にかかわつた噂は「親分」が旅立つ三年前からも



はやあつた「昔」のこととなり、数えてみると、この小説の冒頭部分で「親分」が「子分」に告白した「今日」の対話からすると、六年前のこととなるはずであらう。

つまり、鼠小僧次郎吉はいるはずがない時間にはみ出してしまい、いたはずである期間には不在だったということになるわけで、このことは、時間と空間の一致していないことを意味している。そこで仮に、まず「親分」が本物の鼠小僧だとすると、このテクストの第二節では、「親分」の「おれ」は第一次の聞き手の重吉にも第二次の聞き手の「子分」の裸松にも嘘をついていることになる。また一方で、もし「親分」が本物の鼠小僧ではないとすると、彼は裸松ないしテクストの読み手に発信した「鼠小僧と江戸で噂が高かったのはこの和泉屋の次郎吉の事だ」ということも嘘になる。あえて作者は「親分」に嘘をつかせているということになる。

こうして、テクストの「親分」と重吉の語りにおけるいくつもの矛盾のために、そのオチによって、「親分」が本物の鼠小僧でありながら、本物の鼠小僧でないことになってしまふ。この宙吊りにされたままの「親分」の語りからは、判断が下せない状況が生じ、それによって、この小説の物語内容は真／偽のパラドックスに陥ることになる。

#### 四 嘘が信じられるプロセスと意味

この重吉の嘘については、先行論ではテーマと結びつく肝心な箇所として取り上げられてきているので、ここで、ここでは簡単に触れることにする。テクストで唯一あらわにされた「嘘」に焦点をしぼる。この嘘の成立には、当時鼠小僧という名高い「義賊」の名声、それに旅籠屋の聴衆たちが彼をヒーローと見なしている妄信が大きくかかわっていることが考えられる。それでも、作者芥川は旅籠屋の人たちの心理を時代背景と結びつけて、「赤貧の為に、赤手空拳よく武士階級と富豪を襲ふて金子を窃取し、夫を貧者に恵恤し小さい乍らも反抗を示した者のある事を知ると共に、某義気の発露を見出すのである。斯る畸形的文化世相にあつては、之を義賊と讃称して、悪をも歎美すると云ふ変態心理状態にあつた事は、蓋し避け難き自然の趨勢であつた」<sup>13</sup>。ろうと皮肉な眼差しで捉え返している。ここでの「畸形的な文化世相」や「変態心理」は芥川の別の言い方をすると、「妙な名前」(『戯

作三昧」からの引用を参照」という言葉で表わされる。その歪んだ心理によれば、「鼠小僧」の名を聞くだけで、いくら「途方も無え悪事」ばかりをやつていても、優遇してやろうとする変態に近いともいえる「愚」が分からないでいるということになる。こうして旅籠屋の聴衆の「愚」＝妄信は自ら皮肉の対象となつてしまふ。

ただたとえそうではあつても、その妄信の背後に、マスコミ的に働いた大衆の共通認識の形式という責任も問われるべきである。聞いた話あるいは自ら見たことを合理的な価値基準で判断せずにそのままに伝えるとすれば、それ自体、もつとも「愚」というになるだろう。テクストにおいて「親分」にただちに嘘が見破られた重吉の「愚」がそれにあたる。それだけではない。実は重吉も妄信を作り上げた一員であると同時に、「群衆の被誘と軽信の心理」<sup>1)</sup>を狡猾に利用して、旅籠屋の人間全部に嘘を信じさせてしまったのである。

さらに、第三節で指摘した「親分」の嘘を見てみよう。まずは、旅立つ時の悪天候や旅装束など生き生きとした描写は実に計算的に語られている。ここから三人称の語り手は、「親分」の「おれ」に変わることで、一人称で語り始める。粹小説として、この小説が「親分」の八王子での体験を語るという形式に沿おうとするからである。「親分」の旅装束と「旅慣れなえ」「気の毒」さとが重吉などの「通りがりの人」を騙すとともに、かえつて「これは旅慣れない江戸っ子だ」と旅路の人々から信頼が得られることになる。それというのも、「旅慣れ無」え身振りや旅装束などによってわざと「気の毒さ」を装うからである。この描写は確実に結末のプロットと前後呼応し、「親分」が意識的に人に知られたくない自己の身分を隠すためであるかのように読まされる。

このような前提の上で、「親分」が旅籠屋で胡麻の蠅と遭遇した後、「勘定」を終えて再び出発しようとする時点で、梯子口で重吉の話を偶然に聞いたというシチュエーションにおける表現法は興味深い。というのは、「親分」の騙り方は、重吉の自己宣伝の方法となんとなく似ているように思われる。両者ともに、反復によつて聞き手の好奇心を惹き起こすように、色々な仕掛けを提示しつつ、最後に「正体」を明かすといった手法を採っているからである。「親分」の場合では、

「すると、その中にどう云ふ訳か、度々さつき手前の話した、鼠小僧と云ふ名が出るぢや無えか。おれは妙だと思つての、両掛の行李を下げた儘、梯子口から下を覗いて見ると、広い土間のまん中にや、あの越後屋

重吉と云ふ木念人が、縄尻は柱に括られながら、大あぐらをかいてゐやがる。：葉伍頭から湯氣を立てて、忌々しさうに何か云ふのを聞きや、(後略)(二二二—二二三頁)

というようにへ垣間見やへ盗み聞きなどのような手段が利用されることによつてこれより先はどう展開するかという聞き手の聞こうとする神経あるいは欲望が刺激されているに決まつている。それと照応的で、重吉のほうにおいても、絶え間なく甲州街道で世間に知られたと思われる「途方もなえ悪事」を「豪勢」に「饒舌り立て」いた。旅籠屋の「田舎者」などには、「あの野郎のぼんぼん云ふ事が、ちつとは効き目があつたらう」というように、結局重吉の話に乗つた挙句に、「番頭の葉伍頭め」は「何と思ひやがつたか横手を打つて、」や、読めたぞ。読めたぞ。あの鼠小僧と云ふのは、さてはおめしの渾名だな」と引かかつてしまつた。

それでも、問題なのは、それとなく暗示された仕掛けに引かかるとどうかである。すべて聞き手あるいは読者の判断次第とはいへ、とどのつまりは聞かせてしまつたことから騙りの焦点をどこに絞ろうとするかという問題となる。「親分」という人物が語り手になつた第二節では、彼は重吉のストーリーの聞き手に代わり、それを伝えるための語り手でもある。もちろん重吉に挟み込まれた暗示に引かかるとは、彼に、彼の騙り方の方でも重吉よりうまいのは、聞き手の野次馬心理を利用してゐるからだ。「梯子口」で「覗いて」聞いた話というのは読者に好奇心を引き起こさせるにはもつとも効果的である。それに次いで、梯子口で暗示的な心理描写が三箇所おかれてあります。「親分」が梯子を降りるまでは、それぞれ「実は梯子を折りかけたおれも、あんまりあの野郎の権幕が御大さうなものだから、又中段に足を止めて、もう少し下の成行きを眺めてゐる氣になつたのよ。」(二二四頁)と、「おれはあんまり莫迦らしいから、もう見てゐるがものは無えと思つて、二三段梯子を下りかけたが：それが聞きたさにもう一度、うすつ暗え梯子の中段へ足を止めたと思ひねえ。」(二二七頁)となつてゐる。これら梯子口での場面をだんだん読んでいくと、冒頭部分の親分の身振りや旅装束に関する描写を思い出して、(一時的)であつても、容易に「親分のほうが本物の鼠小僧だらう」との考えが読者の心理に浮かび上がるのではないだろうか。「覗き」を利用した騙り方は、語り手自らの視線によつて切迫した臨場感が与えられることから、映像的にインパクトをもたらそうとする創作意図が読み取れる。その臨場感を反復することによつて感染力が發

生し、ある意見が読み手の中で形が付けられるようになった結果、疑うべくもない威嚇が生まれることであろうという創作技法も容認できる。

こうして、「親分」を本物の鼠小僧と判断するように仕掛けられた読者は騙されてしまうかもしれない。それは、前の重吉は嘘をついたことがすっかり暴露されたのだから、今度の「親分」のほうは真正正銘の鼠小僧だろうと軽く笑って信じてしまうのではないか。同時に、テキストには「親分」が「本物の鼠小僧だ」との暗示がさまざまに仕掛けられていて、すべて聞き手や読者の判断を紛らわす権威的にみえる要素が十分設置されている。奥野説にもあるように、「親分の衣装や髪型や持ち物などから、講談に慣れた読者にはとくに親分は鼠小僧であることが分かる」といった「仮面」的な動因と直接につながっていて、いわば仕掛けられた落とし穴だろう。つまり、人物の「仮面」の一種と理解される「衣装」類に対する重視が、この小説において第三節で挙げた文脈の矛盾点を軽視化ないし無化させてしまう。

実は、テキストのタイトルにおけるメッセージ性も作者によって巧妙に利用されているといえる。このタイトルが読み手の目に入った最初から、講談や芝居などを通して読者の中にあるはずである江戸の義賊である「鼠小僧」のイメージがテキストの生産に参入していることがいえる。そのイメージはどのような経路をたどるにせよ、「鼠小僧」の物語に対する既成の情報として、つまり一種の原型として、読者の頭の中ではテキストの筋立に混入させながら意味作用を働かせているにちがいないと断言できるのである。そのような（原型）があるだけに、講談を熟知した読者にとっては「オチまで読まずとも男が次郎吉だと読める」<sup>15</sup>という読みが出てくるのも認めざるをえないであろう。むしろ、テキストと結びつけると、読者の中にある原型によって「鼠小僧」に関する人物造形が比重を増すことになる。人物造形とは、彼が身に付ける「衣装」であり、また「外形」のことであるところから、芥川作品から読者が読み取るうとするのもそれらに偏るのも自然なわけであろう。

このように、「衣装」を含めた人物描写は嘘のつき手（重吉や親分など）の助けになり、それは文字通り中身を覆い隠すための「仮面」の役割を果たしている。むしろ、テキストに秘められたいくつかの矛盾は、「このテキストを読んでるあなたは、ひょっとしたら旅籠屋の人たちのように、テキストに出された情報を分析もせず、そのまま信じてしまっってはならないよ」と作者が読者の反応を予想しながら作られた作品であることを示唆してい

るのだろう。

それでは、テキストに容易に見破れない「嘘」を織り込んだ描き方に託されたテーマとは、果たしていかなるものであるか。それはテキスト全体の構造とどのように関係しているのだろうか。本稿の結論として、物語をめぐって多重化された聞き手（そこに読者も含まれる）を主体にして、それぞれの関係を検討して結びとしよう。

## 五 鏡像関係と円環構造

テキストのストーリーは、重吉の嘘を核に、その核を包むかのようにして、「親分」の物語があり、そして冒頭と結末に「親分」と「子分」の会話がそれらを挿み込みといった入れ籠構造のような形式をとっている。これまでに論じてきたところから、このテキストにおける「親分」「子分」の関係は、テキストの創作との関連性であり、「親分」が旅する前に外部から規定された因縁での親分、子分のような関係ではない。「親分」と「子分」はテキストの意味作用としてそれぞれにその役割を分担していることはいままでもない。

まず、この二人に対してテキストにおいての呼び方に注目したい。テキストでは、登場人物の名前はすべて会話文に伴って分かるようになっていて、途中で明らかにになった名前に対応する人物に対してでも、地の文では一度も使われたことはない。特に「親分」と「子分」に対していえば、「親分」には「色の浅黒い、小肥りに肥った男」「親分と呼ばれた男」「色の浅黒い、唐棧の半天を羽織った男」とあるだけであり、「子分」には「色の白い、小柄な男」「小弁慶の浴衣を着た男」「剗青のある、小柄な男」というだけである。この書き方にはどのような意味を持たせているのだろうか。名前があっても直接使わず、その身体の特徴や服装を代用していることは、繰り返しているように、このテキストで服装や外見がいかに重要視されているかをそれとなく暗示しているのだろう。

それに、第二節でも述べたように、情報の入手手段の違いから異なる印象をもたらすことも視野にいれねばならない。一例として挙げるならば、講談や芝居に詳しい読者と歴史書物に詳しい読者の間では（読み）のプロセスがどこかでずれるのではなからうか。前者が注目するところは必ずしも後者も注目することにならないからである。そうすると、第二節の典拠などからの引用でわかるように、見かけからする「鼠小僧」は、「小柄」「肥り」、

「色白い」、格好良い「職人風」、「刺青」あり、という特徴でまとめられる。すると、このテキストからみれば、「鼠小僧」っぽいところは、「親分」にも「子分」にもそれぞれ多少備わっていることは確かである。というのは、一人は「いなせ」で、もう一人は「凄みのある、自堕落」な趣を有し、いずれも江戸時代に流行っていた「伊達男」風の美意識がうかがえるからである。ちなみに、先行論がいうシングの戯曲『西国の伊達男』<sup>1)</sup>の影響を受けたのではないかという指摘とも暗合している。それに、二人とも「年輩は彼是同じ位」で、髪型も「刷毛先を少し左へ曲げた水髪」であり、つまるるところ、二人における類似点が多いことで、殆ど相似しているとも考えられる。そこから作者芥川には「鼠小僧」の特徴をこの二人に分担させようとする意図があったかもしれない。もし「親分」が嘘ついたのであるなら、「子分」のほうは本物の鼠小僧の可能性もあるということになる。そして、これも一つの仮定だが、もし以上にまとめた「鼠小僧」の特徴が読者の内部にある原型と見合っているとしたら、この「親分」と「子分」はそれぞれ分担の役割によって、ある程度「鼠小僧」原型を反映しているといえるところから、どちらも原型の鏡像となっているともいえる。

このように考えられるとすれば、本物の鼠小僧が一体誰かはすでに検討される問題ではなくなってしまう。それと共に、「親分」はこのフィクションにおける主役か脇役かの意識も薄まってしまふ。それによって、二人の間に対等な関係が構築され、いずれも「鼠小僧」の原型に当てはまるとするならば、それぞれが「鼠小僧」のパロディーとなり、パロディーであるならば、いくらでも誕生させることができるようになる。すなわち、「親分」「子分」はそのパロディーの派生する最初の二つの形に過ぎないということになる。もしも「子分」の裸松は「親分」の話を別の人に語って、最後に「おれが本物の鼠小僧」だといひ、その別の人もまた別の人に同じことを語るとすれば、結局、嘘は尽きることなく、いつまでも続く果てのない循環になってしまう。もちろん、この別人は、「親分」「子分」のように「鼠小僧」の原型と似ている扮装をして、江戸にいる職人風の任意の人物でさえあれば、誰もがあてはめられる。そうすると、テキストの外部にいる読者も、ひよつとすると、テキストの内部に入り込んでしまい、その鏡像関係が外部に向かって延びて行くとすれば、テキストにある「オチ」は実生活でも延々と繰返して上演されることになり、それによってテキストの内部と外部が融合し、永遠に終わらないテキストになってしまふ。これで、前の三の部分で論じられたテキストにおける文脈上の矛盾点(パラドックス)の

疑惑が分解してしまう。先行の石割論でも触れたとおり、この小説は芥川の「探偵趣味」とかかわっているのは疑われないが、しかし、本格的な探偵物と異なり、テキストに託された作者の趣旨は、読者に挑戦し「どっちが本物か」という謎解き類を作ろうとする戯れになかったと推測されるのであろう。その「歴史物」の本質を考えると、「歴史」そのものが語られる対象であるべきであろう。その意味からすれば、テキストに設定される歴史背景を少し触れる必要がある。

実は、この終わらないテキストという性格についていえば、このテキストの内部にも示唆される重要な手がかりが存在する。それは「親分」の「旅」である。

「だがの、おれが三年見無え間に、江戸もめつきり変わったやうだ。」

「いや、変わったの、変わら無えの、岡場所なんぞその寂れ方と来ちや、まるで嘘のやうでござますぜ」「かうなると、年よりの云ふぐさちや無えが、やつぱり昔が恋しいの。」

「変わらなえのは私ばかりさ。へへ、何時になつてもひつてんだ」(二二三頁)

以上の引用から、「親分」が旅をする前と後でも、「子分」の裸松の生活ぶりは一つも変わらないことが認識できよう。ただ、「岡場所なんぞその寂れ方と来ちや、まるで嘘のやうでござますぜ」という言葉から、この三年間に江戸にはいろいろなことがあったと窺える。しかし、彼のいうこの「三年間」はいつかと特定できないため、鼠小僧が生きた時代を想像すると、江戸の三大改革の一つの寛政改革と天保の改革の間と重なっている。しかも、それらの改革の前に歴史上で「賄賂政治」と批判された田沼時代を経ていることが忘れてはいけぬ。もちろん、それも一般化することが可能なであろうが、つまり、天災や飢饉、それに為政の改革などが歴史を貫いた時期だったと一般的にもいえるからだ。それは江戸の激動の時期とだけは想定される。すると、その「岡場所」が寂れたのも、何かの改革によつたのではないかと考えられる。その岡場所について調べてみると、「宝暦く天明(一七五一〜七八)ごろの岡場所最盛期には、吉原の遊女三千人に対し、約二千人と推定」され、「所在地は、寺社や盛り場の付近、街道の出入り口などに多く、約百九十カ所にのぼる」ことが分かる。その次、テキストに出てい

る「深川」や、「三縁山増上寺」がある芝などが挙げられている。<sup>(1)</sup>その中深川は二十五カ所で、数としては一番になっている。また、岡場所に対する取締りは幕府がずっと続けていたが、「天保の取払いは岡場所に強烈なダメージを与え、以後幕末までほとんど再興されることはなかった」<sup>(2)</sup>と記載されている。ここで言及した天保の取払いは、天保十三年（一八四二）に頒布された岡場所撤廃令であろう。もちろん、歴史人物としての鼠小僧の在世代（一七九七〜一八三二）とは若干ずれているが、フィクションで書かれた「岡場所なんぞその寂れ方と来ちや、まるで嘘のやうでござますぜ」ということは、大体同時期とみなされるだろう。その推定される時期を作者芥川が生きた大正前期と結びつけて考えると、いかなるところが注目されるだろうか。作者の執筆までの大正期を一括してみると、大正三年に発覚された賄賂スキヤングルのシーメンス事件の後にまもなく、第一次世界大戦が次いでいた。その間に日本の近代史上に画期的な意味のある米騒動が起こったという激動期である。それは、いかにも江戸時代、特に前で触れた「執政の臣その人を得ず、賄賂公けに行われて政治正しからず、人民大に窘しめり。しかのみならず暴風洪水などの天災荐に至り、飢饉もまた相次ぎしかば、貧民諸所に騒擾し、遂に江戸の市中にも暴民の蜂起を見るに至」<sup>(3)</sup>った「田沼時代」と似通っているのだろう。まさに当時の歴史家の辻善之助が同書の緒言でシーメンス事件に関して、「歴史は繰返すという事をいうが如何にも尤もだ」と言ったと同じであろう。

ここで辻氏の言い方を借りてみようと思う。テキストにおいては、「親分」の三年前の旅を始まりに「今」の対話時点を終わりに考えると、その始まりと終わりの時点がまったく重なり、同じ「江戸」に集結し、歴史が「繰り返して」いるかのようにされてしまっている。「親分」「子分」の一般名詞の関係が反復可能なこととして歴史的にもいえるのではないかと思わせる。「親分」の出発から結末まで一周してきたが、「子分」の裸松だけではなく、「親分」自身も「旅」を通して、何が変わって何が得られたのかはすべてテキストにおいて論及不可能のことになってしまっている。ここまで、あの始まりも終わりもなく、永遠にみずからの尾をくわえた姿をしているウロボロス像が連想されてくる。この終わりのないテキストにはむしろウロボロスのな「無限な循環」という主題が託されているかもしれない。その無意味にみえる「円」を描くことはテキストで三段式の構築法に具現し、そのもの自身に歴史の「昔」と「今」を髣髴させ、芥川なりの「今昔物」となっているのではないか。



## 六 むすび

以上のように、本稿では、テキストのキーワードといえる「嘘」に幾重層の構造が用意されてあることを本テキストの「謎」として問題を提起し、テキスト自体が不明な大きな「謎」そのものであることを指摘した。嘘の潜在であるがため、「親分」「子分」に設置された外形上の描写が、人物に身の上に緊密にかかわる情報をぼやかすための「仮面」にすぎないことを論じた。そこから、従来問題視されなかつた登場人物の関係同等的だと論述することを通し、テキストにおける「内」と「外」ノ情報源に位置する構造と直結し明らかにさせた。その上、前後相連なる構造に作者芥川龍之介ならではの歴史意識が作用されていることが認識できる。そこで「謎」にされたテキストが作者の真意を伝えるための代弁として機能してくる。しかし、このよう重要な使命を負わされた構造をもつていかなるテーマを弁じているのだろうか、つまりテキストの主題はこれからの課題として、より深く究明する余地があると思わせる。

注

- (1) 佐藤美加「芥川龍之介の『鼠小僧次郎吉』の表現——式亭三馬との比較」『岡大國文論稿』、一九八七年三月  
 (2) 太田善男「初春の文壇(一一)」『読売新聞』、一九二〇年一月一六日  
 (3) 水守亀之助「新春の創作を評す」『文章世界』、一九二〇年二月一日  
 (4) 菊池弘ほか編(明治書院、一九八五年)  
 (5) 吉田精一「芥川龍之介の生涯と芸術」『芥川龍之介』新潮文庫、一九五八年  
 (6) 奥野久美子「芥川龍之介『鼠小僧次郎吉』——講談本との関わりについて——」『日本近代文学』第七三集、二〇〇五年一〇月  
 (7) 石割透「変装と仮面——芥川・谷崎・乱歩など——」『文学における仮面』笠間書院、一九九四年  
 (8) 関口安義(東京翰林書房、二〇〇三年)  
 (9) 饒庭薫村編(文會堂、一九一一年)

(19)(18) (17)(16)(15)(14)(13)(12)(11)(10)

松浦静山（平凡社、一九八一年）

矢野太郎編（国史研究会、一九一七年） 卷之五の天保三年雑記に「鼠小僧の判決書」、「鼠小僧の捕縛談」がある。

三田村鳶魚『江戸ばなし集成・第六冊』（青蛙房、一九五六年）

尾形鶴吉『本邦侠客の研究』（西田書店、一九八一年）

ギョースターヴ・ル・ボン『群衆心理』（大日本文明協会、一九一〇年）を参照のこと。

同注（6）

注（2）に出た「有名な愛蘭土の戯曲」と同じく、シングの原作品における山本修二訳（岩波書店、一九三九年）による。

西山松之助『江戸ことは百話』（東京美術、一九一五年）

前掲書。

辻善之助『田沼時代』（日本学術普及会、一九一五年）